

静岡県版レッドデータブックが改訂

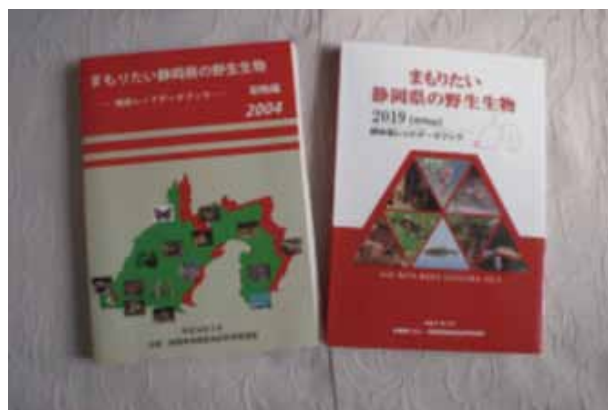
板井隆彦

まもりたい静岡県の野生生物 2019、動物編—静岡県レッドデータブック—が静岡県くらし・環境部自然保護課より3月31日付で発行されました。植物編は植物、菌類を合わせて別分冊として今年度発行される運びとなっています。レッドデータブック（以下ブック）の作成に各部会員・調査員として関わり汗を流していただいた方々（中には自然博ネットの団体・個人会員も多くいらっしゃいます）に、ブックの編纂を行った静岡県自然環境保護調査委員会を代表してお礼を申し上げます。

今回発行された動物編では2004年版のほ乳類、鳥類、は虫類、両生類、淡水魚類、昆虫類、陸・淡水産貝類の7分類群に、新たにクモ類が追加されました。掲載種は474種で、2004年版より89種増えました。増加の理由にはいろいろありますが、注目しなければならないのはアカハライモリ、ツチガエル、ニホンウナギ、ドジョウなどわれわれのごく身近にいてこれまで普通種と考えられていた動物が新たに追加されたことです。身近な自然環境がさらに悪化しつつあることを示しています。

開発や整備が着々と進められてきた日本列島の中であって、静岡県にはなお市街地の近くに田んぼのある風景が見られます。しかしそれはかつてとは随分違ってしまいました。水路や小溝はコンクリートで整備されてひどく人工的になり生き物に乏しくなっているのです。かつては田んぼまわりの水路や小溝にはさまざまなカエルや魚、昆虫、貝などが見られる賑やかな生き物の世界があり、子供らの遊び場となっていました。しかし1970年代に入るとゲンゴロウやヘイケボタル、ナゴヤダルマガエル、カワバタモロコなどが次々と姿を消していき、今やトノサマガエルやツチガエル、アカハライモリ、ミナミメダカ、ドジョウ、マシジミなどさえレッドリストに載るようになってしまい、子供たちの姿も田んぼまわりから消えてしまいました。

こういった変化はその時点時点ではあまり気づかず、後になって振り返れば急激な変化だったことに気づきます。筆者が関わってきたのは淡水魚類ですので、ひとつの例として



2004年版と2019年版
動物編—静岡県レッドデータブック—

ブックに絶滅危惧 IA 類としてあげられているカワバタモロコを紹介します。この魚は平地の水田など湿地まわりの水路や池に生息し、繁殖期の雄が黄金色になる美しい小魚で、1960年代あたりまで静岡県の中部地域以西に広く分布していたようです。ところが1970年代には生息地はきわめて限定的になり、1990年代の終わり頃にはそれまでに知られていた生息地の7箇所を失い、生息地は4水系6箇所となり、今回のブックではさらに2箇所を失って3水系4箇所となってしまいました。残る生息地も個体数の減少に悩んでいます。カワバタモロコは現在は静岡県希少野生動植物種に指定されていますが、静岡県からこの魚が消えてしまうのはそう遠くないのかもしれない。

生き物を取り巻く環境は月日とともに変化します。このためレッドデータブックも定期的に改める必要があります。次回の改訂は10年後あたりになると予想されます。これまで行われた2度20年にわたるブック作成のための調査は淡水魚類部会に限らずどの分類群の部会でもほぼ同じ体制で行われてきたようですが、さらに続けるのは難しそうです。幸い静岡県の自然史資料の収集・保管と情報発信の拠点となる『ふじのくに地球環境史ミュージアム』が設立され、活発な活動が行われるようになりました。今後のブック改訂についてもミュージアムが中心となってやっていただけると期待しています。